

熊野地域の計画——熊野本土の現代的意義を求めて——

京都大学工学部 正員 佐佐木 綱

1. まえがき

熊野地方は平地に乏しく、交通の不便な僻地としてとり残されてきたが、この不便さを乗り越えて峻険な山道を、多くの民衆の「蹊の熊野詣」といわれるような1000年にも及ぶ迎礼が熊野へ、熊野へと続いた歴史を考えると、熊野を知る手掛りというものが熊野詣に潜んでいるものと思われる。なかでも平安から鎌倉時代へかけての200年間は、京都からの朝廷による熊野御幸は100回に及ぶものがあり、決定的な権威を与えたものと思われる。当時の熊野への旅はいまとは比較すべもないほどの難行苦行であったろう。それだけの魅力が当時の熊野にはあったはずであり、いまの熊野にも残っているにちがいない。ここで熊野詣の現代的意義を発見し、熊野の果してきた役割を、将来にあたって展開していくところに熊野地域の振興計画の中心があるろう。

2. 過疎化の進行と計画課題の抽出

とりあげた対象地域としては、新宮川流域と熊野灘沿岸を含む市11町8村であり、人口は表-1に示すとおりである。また、昭和45年からの人口減少の様子は図-1に示すとおりである。

海岸部においては人口減少に歯止めがかかったが、内陸部においては5年間に10%以上の人口減少が続いている。

内陸部における過疎化のプロセスを検討してみると、図-2に示すようなフローチャートを得た。すなわち、過疎化の特徴として

- 1) 後継者不足と高齢化による活力の低下
- 2) 所得の低迷による生活の貧困化

表-1 熊野地方における人口・推移 (昭和45年～昭和55年)

市町村名	人			昭和55年と昭和50年		昭和50年と昭和45年		面積 (km ²)
	昭和55年	昭和50年	昭和45年	増加数(人)	増加率(%)	増加数(人)	増加率(%)	
新宮市	39,992	39,023	38,808	969	2.48	215	0.6	79.78
串本町	18,849	18,997	18,905	-148	-0.78	92	0.5	91.31
那智勝浦町	23,002	23,596	23,871	-594	-2.52	-275	-1.2	184.22
太地町	4,540	4,433	4,566	107	2.41	-133	-2.9	5.81
古座町	7,404	7,766	8,236	-362	-4.66	-470	-5.7	45.86
古座川町	5,030	5,365	6,078	-335	-6.24	-713	-11.7	293.76
熊野川町	2,434	2,725	3,265	-291	-10.68	-540	-16.5	176.56
本宮町	5,054	5,398	6,147	-344	-6.37	-749	-12.2	204.39
北山村	788	1,015	1,135	-227	-22.36	-120	-10.6	47.29
天川村	1,121	1,285	1,405	-164	-12.76	-120	-8.5	175.08
野迫川村	1,090	1,274	1,653	-184	-14.44	-379	-22.9	110.97
大橋村	6,628	8,086	8,502	-1,458	-18.03	-416	-4.9	669.77
十津川村	1,801	2,051	2,360	-250	-12.19	-309	-13.1	135.88
下北山村	1,155	1,463	1,717	-308	-21.05	-254	-14.8	273.52
尾鷲市	31,348	31,797	31,562	-449	-1.41	235	0.7	196.02
熊野市	26,062	27,026	28,732	-964	-3.57	-1,706	-5.9	257.62
海山町	12,776	12,822	12,850	-46	-0.36	28	0.2	146.13
御浜町	10,544	10,575	11,081	-31	-0.29	-506	-4.6	89.88
紀宝町	8,357	8,049	7,876	308	3.83	173	2.2	76.50
紀和町	2,658	3,614	4,177	-956	-26.45	-563	-13.5	112.97
磯路村	3,820	3,265	3,023	555	17.0	242	8.0	2.98
合 計	217,660	223,279	229,989	-5,619	-2.52	-6,710	-2.92	3,531.44

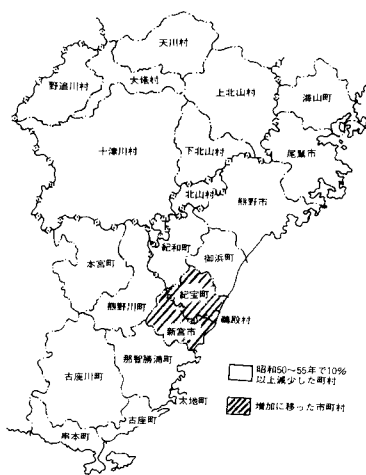
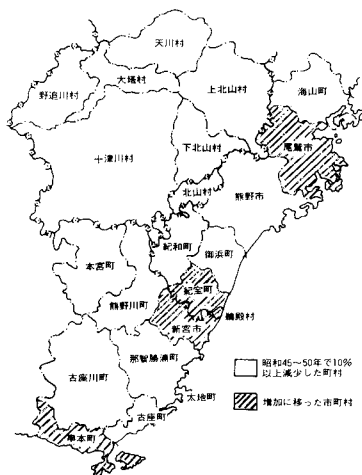


図-1 過去10年間の人口推移

- 3) 生き甲斐と喪失した孤独な高齢化社会の現出
 - 4) 医療・教育など行政サービスの消失によるコミュニティの崩壊
 - 5) 山林の荒廃も中心とした国土の荒廃
- 等が促進される。

この過疎化の流れを逆転させるためになすべきことをフローチャート形式に整理してみると図-3に示すような四つの計画課題に帰結することになる。

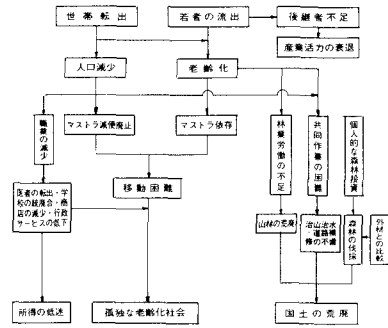


図-2 山村型過疎化のプロセス

- 1) 地場産業・観光産業の振興
- 2) 熊野文化を生かした独自の産業の振興
(しかも交通依存度の少ないもの)
- 3) 大都市との直結交通網の整備
- 4) 国土保全

この中で、交通施設の整備をまつてから地域振興を図るというのでは、交通施設が先か地域振興が先かといった循環論に陥る可能性があるが、2)の交通依存度の小さい産業で、しかも熊野の歴史に合致するものを選ぶ必要がある。

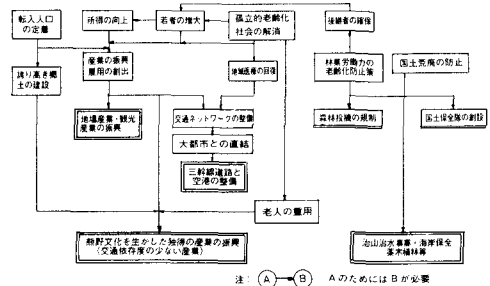


図-3 計画課題の抽出

3. 熊野の文化と風土

熊野を考えると、11世紀から13世紀にかけての朝廷による熊野詣とピークとする熊野三山巡礼も無視することはできないであろう。

平安初期(907年)の宇多法皇の参詣に始まる熊野御幸は院政時代に最高潮に達し、特に白河上皇(1090年)の熊野詣から龜山上皇(1281年)の御幸までの200年間には100回に近い御参詣が行われた。この時期とはざんで約1000年の熊野信仰が続いたのである。続々と連なる熊野三山巡礼は「嘆の熊野詣」として、その庶民性、信仰の深さ、歴史の長さにおいて特筆すべきことである。病患者小栗判官と照手姫の物語のように、多くの恵みもない人達にとって最後の救いも求める地でもあった。参詣路は峻険と極め、汗と血と涙の巡礼であったろう。

戦に敗れて逃れてくる人達に対しても暖かく迎え入れる弱者・敗者救済の風土を熊野は培ってきたのである。(図-4参照)

熊野御幸のピークであった1090年から1281年という119年、ヨーロッパの十字軍の遠征と時期をともにしているのも興味深いことである。1095年のウルバヌス2世の十字軍宣言に続く、第1回目の十字軍のエルサレム巡礼は1096年の出発であったし、十字軍国家の消滅は1291年であったことを考え合わせると、その発生の理由はともあれ、総の里帰り現象のように思われる。エルサレムがキリストとイスラムの両宗教の争奪戦になっていったのに対して、熊野は古代神道と佛教と巧みに受け入れていったのである。

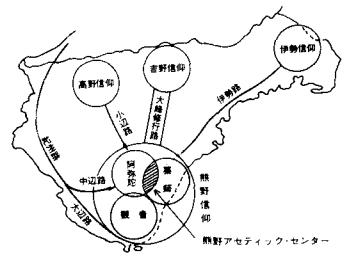


図-4 熊野詣のあちすじ

世であるならば、熊野の必要とされる時代なのである。末法思想の研究によれば、そのような単純な周期説よりも、各時代時代ご末法の世が覆かかれており、特に明確な定義はない。

現代が物質に恵まれ、その裏腹に精神的荒廃が進んでいるが、現代の諸相と熊野時代と比較してみると、熊野の復活のさざしを感じることができそうである。次の表と比較してみるとよからう。

- 1) 権力の弱体化と権威の失墜
- 2) 既成信仰の崩壊(科学技術信仰の崩壊)
- 3) 災害・難産
- 4) 既得権の喪失(貴族の荘園制度の崩壊など)
- 5) 資源の枯渇
- 6) 国際的緊張
- 7) 不確実性の時代

一方、現代において要請されつつある思想の転換として

1) 物よりも心を 2) 数量よりも瞑想を 3) 物的整備よりも文化重視へ 4) 強者への隷属よりも弱者に対する大いなる献身を 5) 苦悩よりも決断と捨身を 6) 知識よりも智慧を 7) 組織への忠誠心よりも自己の確立を 8) 学力よりも体力を 9) 管理よりも野生的自由を など
があげられよう。

このような要望に応えるためには、熊野の果しうの役割が大きく、これらの要望を満たしう地域整備が必要である。

熊野は日本民族のルーツである。それは政治が民衆の心をとらえることができなくなってきたとき、日本人としての思想の原点に立ち帰って自己のあり方を再点検するという意味で、熊野が復活してくるであろう。

5. 熊野浄土と土地利用

浄土とは「諸佛が修行中に決意した誓願によって建立された清浄花嚴な国土」を意味するが、諸佛が沢山あることから浄土も沢山ありと考えられる。熊野浄土は熊野三山を中心とした地域が対象となる。この地域の土地利用を考えていくと、ある程度三尊信仰によってニュアンスを变化させることもよからう。そのときには

- 1) 本宮を中心として 阿弥陀浄土的に
- 2) 那智勝浦を中心として 観音浄土的に
- 3) 新宮を中心として 薬師浄土的に

として、土地利用にそれぞれの特色を生かすことが考えられる。

しかしながら、各佛の特色に対する解釈がかならずしも統一されているわけではなく、共通に誓願することは衆生の救済にあるのであるから、これら三尊の役割を判然とさせる解釈が正当であるとも思われない。しかも熊野三山においては、三尊を合祀する形式をとっていることから考えても、それほど区別した土地利用が提起されるものでもないであろう。多少の相違が折り込まれることも一味違った土地利用になって興味深いかも知れない。

(1) 阿弥陀浄土

わが国における阿弥陀信仰は愚鸞が640年(舒明天皇時代)に無量寿経を講説したことに始まると日本書紀に記されているようである。特に平安時代に入ってからには難陀教の華師、観音などの信仰よりも大きく飛躍し、天台宗円仁の「山の念佛」から空也上人の「躍り念佛」と呼ばれる娯楽性と視覚性もかねた念佛形態が現われた。法然に至って専修念佛という形が一般に広まった。阿弥陀の教えは無量寿経の中び立てられた48の誓願について考えてみると便利である。48の誓願を現代的に実行することが可能かどうか、そしていかにして達成すべきか、またその中になにに重宝をあたえた地域を想定するかである。

武藤義一教授(東大生産技術)によれば、この48願中、18願(念佛往生)、19願(臨終現前)、20願(極徳徳本)については詳細に説かれているけれども、それほど次元の高い願だけでなく日常生活における庶民の苦痛を救っていかうとする諸願が多いのであって、現代病にかかっている人達には、それなりの教典の解釈とプロセスを通す必要があると指摘されている。阿彌陀佛は欲望の塊りである人間の望みをかなえながら、少しずつ高い次元へ引き上げていく佛なのである。現代的意味の「山の倉佛」による人間完成を目標として、

- 1) 魂の再生、 2) 弱者救済、 3) 心身の保養

を柱として、たとえば「山の音楽」「山の躍り」などといわれる分野を育成し、宗教音楽・舞踏のセンターを計画するのも一案がある。自然な舞台装置によって設計されると面白い。

(2) 観音浄土

阿彌陀三尊の中の脇侍としての観音菩薩はもともと佛の慈悲のシンボルであったものが独立して宗派の対象とされてきたものであり、日本への伝来は推古の時代といわれている。観音は救いを求める者に応えて33の姿をとり変えて助けるといわれているので、数多くの形の様式の佛像が造られたようである。中世には観音信仰が全国に流布し、観音経は身の安全を守る経とされ広く読誦された。江戸時代には有力な現世利益神として盛んな信仰を集めた。熊野地方は観音信仰の盛んな時期には補陀落浄土とも呼ばれ、補陀落渡海上人の続出は一時代を画したものである。観音菩薩の通力のうち、現代的要請も含めて「慈悲の精神」と「危険予知」をモットーとする考え方も成立する。たとえば、

- 1) 危険予知と防除のための能力開発 2) 人間関係改善のための学習と実践(HR訓練) 3) 心身の保養・慰安

などを柱として温泉保養とトレーニングも兼備することである。

(3) 薬師浄土

薬師信仰は7世紀後半からといわれているが、今日まで現世利益の佛として永く信仰されている。薬師本願經によると薬師如来の12の大願が立てられているが、内容は総じて極めて現実的である。この中のや7願が除病安樂であり、大衆の中に深く浸透したものである。12の大願の具体化を現代風に解釈してプロジェクトに育つものもとりあげてみると、心身の健康管理センター構想と結びつくはずである。たとえば

- 1) 生薬、自然食品、薬草食品などによる食物管理 2) スポーツ・リハビリテーション・旅行も含む体育センター 3) 生き甲斐のある自治(権力なき支配)の実現

などが考えられる。

6. 熊野の都としての新官市

新官市周辺を薬師浄土的なイメージで整備する基本方針として、生あるものはすべて健康で明るく壮快に生きる潜在力を秘めているものとして、心身の健康の回復への願を掲げる。

それは図7に示すように、熊野アセティック・タウンの構想であり、アセティック・センター(Ascetic Center)、グレー・パワー・町、和漢薬産業センターの三大プロジェクトからなっている。

(1) 熊野アセティックセンター

日本民族の魂のふるさととして、心の病、健全な肉体を保ち、強靱な精神力を開発すること。熊野の各地にアセティック道場を置き、有極的運動を囲むとともに、地域の健康管理センターとして機能できるように計画する。計画の背景としては、科学技術への終末観、欲望充足への懷疑、乱世における自己の確立、青少年の暴走、家庭の不和と崩壊、老人の孤独、精神医療としての宗教的修行の認識な

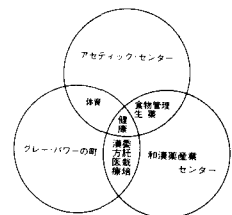


図7 三大プロジェクトの相互関係

(2) ケル-パワ-の町

(3) 和漢華産業センター

またこれらのプロジェクトの配置構想は図-11 に示すとおりであり、アセテックセンターの回峰道が自然道場として付記されている。なお最後にこの研究は京都大学工学部岩佐義朗教授を主査とした研究の一部であることを付記する。

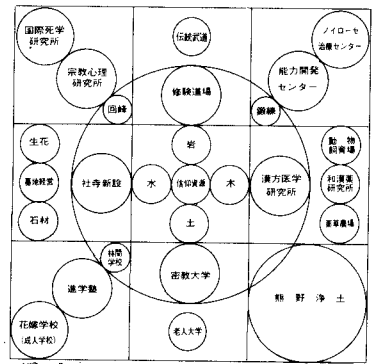
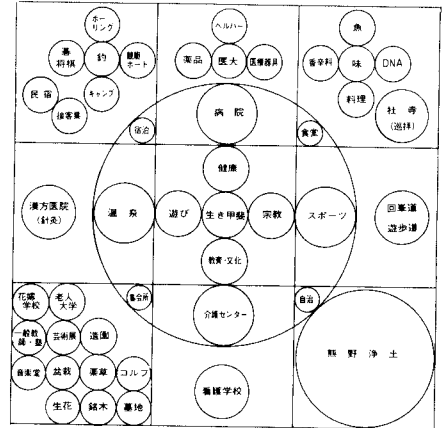


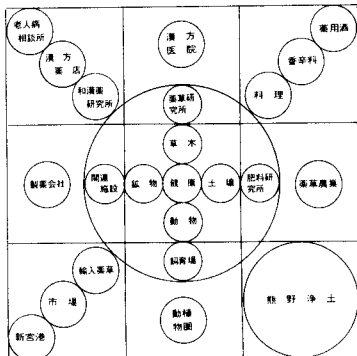
図-8 アセティック・センターの関連事業



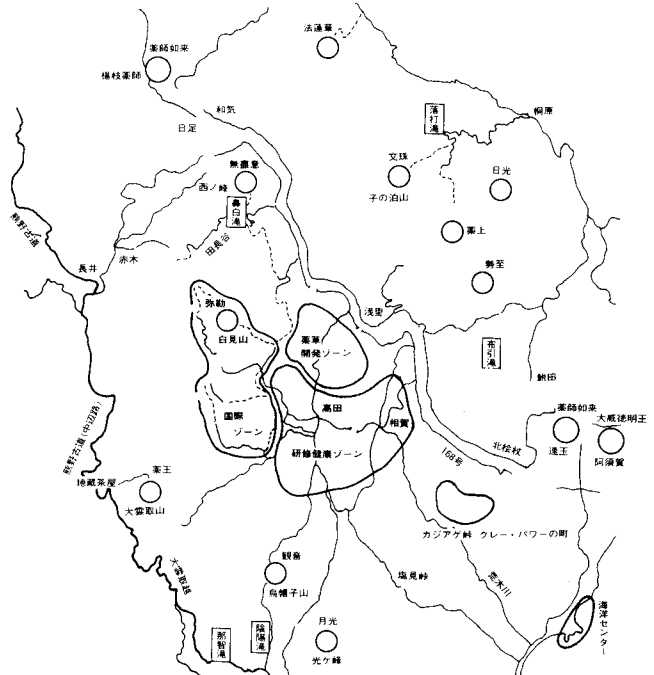
〔四〕- 9 グレー・パワーの町の関連事業

観 点	活 用 面
研究 栽培 分析 薬草分析 遺伝 子組替 産 出 品 高 齢 者 対 策 治 療 法 道 路 付 属 物	品種改良 (薬物含有量の多いものへ)、栽培法の確立 水薬草の開発、活葉薬草の開発、植物園 農薬の影響、天然の薬草化 ミルミ等の動物飼育 薬材生産、試験栽培、薬草盆栽、薬草園芸、薬草温泉 特徴の樹林 花田裡、並木道、歩道道 市街ではチャウの市街路あり。日本へ輸出中 薬草公園、生垣に利用、緑帯緑地、薬草花壇 薬草料理館、薬草茶、薬草酒、香辛料、試飲料、薬草
景観・造園 文化の文	

表-2 地域開発のための薬草・薬木の活用



④-10 和漢薬産業センター関連事業



④-11 回峰道とアセティック・タウン